

チベタン・チルドレンズ・プロジェクト 2009年収支報告書



2009年決算の解説と2010年の運営

収入の全体における各項目の割合は、開校のための特別賛助金45.2%、開校後の任意の寄付35.7%、サポーター収入18.2%、トレーニング・センター収入(授業料)0.9%です。今回計は、特別賛助金および、その後の任意の寄付を非常に活発に頂いたことにより、黒字で決算できました。

支出に関しては、クンデ・ハウス事業が全体の76.6%を占めます。子ども達の各種証明証作成、学校への入学のための準備、住環境の充実のために投入した設備など、初年度のための項目も多いため2010年の支出は今会計を下回るものと予想されますが、全体に占める割合は依然、クンデ・ハウス事業が突出した支出となることと予想されます。またネパール政府へのTCPの会社登記料(スタッフのビザ代を含む一式¥333,952)など、初年度のための出費もなくなるため全体の総支出は、特殊な事情の無い限り2009年を超えることは無いと予想できます。

しかしながらここで、ネパールの為替レートと物価の変動による支出予測の不明確さについて述べておきたいと思います。

2008年6月にTCPの運営許可を取得して立ち上げの準備を始めた頃の対ネパールルピーに対する円の換金レートは約0.64(2008年9月)でした。2009年10月にはこれが約0.82へと変動。¥10000が6,400Rsであったものが、約1年後には8,200Rsに換金できた訳です。つまりルピーに対して円の価値が約1.28倍になったのです。しかしながらこの間、物価は約2倍に上昇しました。全ての品目が単純に2倍になったとは言えませんが、記録を照会する限り食品はほとんどの品目で単価が2倍に跳ね上がりました。食品でさえこのような状況のなか、そのほか多くの生活必需品も2倍(あるいは物によってはそれ以上)の価格となっています。物価上昇の原因についてここでは詳しく言及しませんが、物価が2倍に対して、換金レートは1.28倍までしか上がらず、この状況により日本円ベースでの出費は2009年度の当初予算を上回る結果となりました。物価の上昇と為替の変動の激しさに鑑みると、2010年度の支出の正確な予測を立てることは非常に難しいと言えます。

2009年12月末現在のサポーター会員は、里親サポーター9名、月間サポーター12名、年間サポーター7名。会員による2010年の定期収入見込みは¥1,612,000。2009年の繰越分が大きいいため、会員の増加がない場合でも2010年の運営もつつがなく行えるものと予測できます。

里親サポーターのサポート月額引き下げを検討したいと考えてきましたが、物価上昇などの不確定要素による不安を考えると、2010年も現況の金額でご協力いただきたいと思います。2010年末に2年の運営の実績を踏まえて、金額の引き下げは再度検討したいと考えています。



さらに詳細な項目について、いくつか解説と報告をさせていただきます。

ネパールの現地スタッフであるチベット予防医学室のアムチと、現地統括責任者・加藤に関しては、TCPより給与は支給していません。これは各人の「TCPの活動は一切が菩薩行」という仏教的な動機に基づく意思を尊重しているためです。アムチの収入の確保に関しては、TCP事業とは切り離れた形で別途準備をしております。東京事務所スタッフ3名も、無償ボランティアです。

チベット予防医学室の診察は、生活困難者には無料診療を実施しておりますので、チベット人コミュニティに非常に好評です。アムチの診察が継続できるように、今後もTCPは必要なサポートを準備したいと考えています。

トレーニング・センターは開講以来、語学講座(チベット語・英語)の生徒の数が順調に伸びていましたが、2009年秋に、教室のあるスワヤンブナートに、チベット仏教のあるゴンパが経営する無料の語学講座が開設されたため、一時的にほとんどの生徒がそちらへと移動してしまいました。TCPはチベット難民のニーズにあった支援をすることが目的ですので、TCPに代わって質の高い語学講座が開設されるのであれば、語学講座を閉講し、他の新たなニーズに対して支援を開始することも考える必要が出てきました。しかしながら移動した多くの生徒は、新しい語学教室に不満を抱えているのが現実です。

TCPでは参加意欲を高めるため、語学講座に授業料(1講座500Rs/月)を徴収していますが、ゴンパの語学講座は無料です。このため生徒の出席率が低く、1度休むと次回からの授業についていけないため、授業が何度も同じレベルを繰り返すことになり、真面目な生徒達は進まない授業に不満を抱えています。この実情を知っているために移動を思いとどまった生徒と、もう一度戻ってくる可能性のある生徒達のために、語学講座は少数でも2010年は維持し続けたいと思います。



生徒の授業料の未納率が27%と高いため、授業料の回収に工夫が必要だと考えています。また参加意欲が旺盛でも、授業料を滞納しがちな生徒に対しては、何らかの授業料免除の方法も考えてゆきたいと思っています。

介護福祉の講座は、2009年はその必要性和有効性がいまひとつ認識されず、開講には至りませんでした。興味のある生徒は少数ですがおりますので、学ぶことによってスキルの差別化を図ることの意義を、まずは浸透させたいと思っています。

クンデ・ハウスには子どもの受け入れについて、非常に多くのお問い合わせが、現在も続いております(亡命シーズンの冬に入って特に多くなりました。)。本土からの要請に加えて、最近では亡命後、直接子どもを連れて見える方もいらっしゃいます。亡命者にはまずチベット亡命政府の事務所へ誘導していますが、難民認定が難しいようで「誰も助けてくれない。」と泣いて懇願されます。貧しい身なりで、あるいはご病気ではないかと思われるようなお体で預けに来られるご様子は、本当に胸を突かれる思いです。

しかしながら施設の規模や運営の事を考えると、これ以上のお引き受けが難しい状況です。クンデ・ハウスは一時的な児童養育施設ではありません。子ども達の人生そのものをお引き受けしています。困っている全ての子ども達をお預かりしたいとは思いますが、人生全体に責任を負うとなると、安易に引き受けることが出来ません。現在お預かりしている子ども達を立派に養育していくことに、今しばらくは集中したいと考えています。小さな組織の活動としての限界を冷静に見極め、現地スタッフは心の中で涙しながら、受け入れをお断りしている状況です。

TCPの運営上、この一年で最も苦勞したことは、優秀なチベット人職員の確保です。オープン当時採用していた職員は、支援物資の横領が発覚し、即刻解雇いたしました。また、学歴の高さに注目し採用した若い家庭教師は、スタッフが目を離れた間にドラッグを使用、同じく即日解雇いたしました。その他にも、あまりにも要求の多い労働条件を突きつけられたり、労働意欲が低かったりする場合が多いのです。現在は幸いなことにアムチのフォローもあり、人格も仕事の質・内容も素晴らしいチベット人スタッフが揃っています。2010年は優秀なスタッフの定着に励み、しっかりとした組織作りに努めたいと考えております。

東京事務所の出費のうち52.7%はTCP現地から要請を受けた、医薬品等の購入による支出です。HP開設によるサーバーの契約・更新料とドメインの取得・更新料が13.1%、残りは、資料制作費、郵送料、2回の報告会の経費です。

ネパール情勢の不安から、どのような思いもかけぬ事態が起こらないとも限らない2010年ですが、TCPは淡々とチベット人難民のニーズに答え、少しでも亡命者の人生の質が向上するお手伝いが出来ればと思っています。

